






山番号	山名 (別名)	登頂順	標高M
97	阿蘇山	51/100	1,592
登頂年月日	山頂天候	年齢	阿蘇五岳の最高峰は高岳。世界に冠たる活火山のカルデラを形成している。東西何れもロープウェイがある。初回は東から往復し、2回目は西から上がり、東に降りた。
2001.11.10		55	
平成13年			
メンバー	11/9博多、ターミナルH。11/10博多⇒熊本⇒宮地TAXI⇒11/11九重山⇒大阪		
単独	複数	ガイド	ツアー
同時登頂百名山	別々登頂	縦走登頂	11/11九重山へ
初回コース	ロープウェイ10:15⇒10:52中岳⇒11:14高岳⇒12:45ロープウェイ<歩程2:30 4.6km 11.2km 標高差312m>		
2回目コース	2009/5/15 18:50大阪南港発夜行フェリー⇒5/16 6:40別府港2009.5.16火口西9:50⇒12:10高岳⇒13:30火口東⇒別府港18:50夜行フェリー⇒5/17 6:30 大阪南港		
<p>← 初回は単独行。博多発、大分着の現地日帰り登山。電車がトンネルを抜けるとそこはカルデラの中だった。先ずはカルデラのでかさにビックリ。</p> <p>38名参加のハッピーホリデイツアーに参加。予報が外れてラッキー、祖母山、九重連山を望むお鉢を巡って高岳頂上に立った。</p>			

山番号	山名 (別称) 韓国岳	登頂順	標高M
98	霧島山	21/100	1,700
登頂年月日	山頂天候	年齢	関西から九州の山に登る方法としては、往復夜行フェリーを利用するのがベストだ。九州の6座の内、開聞岳と初回の阿蘇山以外は全てフェリーを利用した。
1997.4.26		51	
平成9年			
メンバー	主催	橋本、田中氏と参加	
単独	複数	ガイド	ツアー
コースタイム	4/25		大阪南港18:00⇒4/26 8:40志布志港
	4/26		11:15えびの高原⇒頂上⇒16:15えびの高原⇒食事、歩⇒22:20出航 <歩程5:00 標高差520m>
	4/27		⇒4/27 9:45大阪港⇒SAIL OSAKA帆船見学
<p>霧島連峰の最高峰、韓国岳登るツアーに仕事仲間と参加した。金曜の夕方大阪南港を出航し翌早朝志布志港到着、バスで登山口に直行した。共に日頃は運動不足のため、フーフー言って登った。下りは大浪池の縁を巡るコース。火山らしさを満喫できた。当日下山して、帰路も夜行のフェリーに乗船、船内で入浴して夕食を取ってから、ゆっくりベッドに横になって眠れた。夜行バスや列車では味わえない快適さだ。エンジンの振動すら心地良い。日曜の朝には大阪港着、帰宅してからも1日たっぷり時間が有り、疲れも取れていいことづくめだ。</p>			

山番号	山名 (別名)	登頂順	標高M
99	開聞岳	14/100	922
登頂年月日	山頂天候	年齢	錦江湾の番人のように海から直接突き出たコニーデ型火山の姿が美しい。頂上から3方の海が間近に見え、沖には屋久島を望む。頂上は平坦だがごつごつ岩で殆ど灌木に覆われて火口然とした雰囲気は無い。
1995.5.27		49	
平成7年			
メンバー	5/26鹿児島。		
単独	複数	ガイド	ツアー
コースタイム	開聞中9:36⇒山頂⇒14:55開聞中学校 <歩程5:19 4.6km 9km 標高差762m>		
交通手段	往路:5/26 ANA、バス	現地:西鹿児島 JR⇒山	復路:5/27バス、JRで指宿泊5/28JASで東京
<p>富士山のような円錐峰は谷も尾根もないので常に広く景色が開けて見える。しかし登り方で富士と開聞岳は大きく異なる。富士は殆どがジグザグ登りであるが、開聞岳は時計回りのらせん状なので連続して景色が変化して行くから面白い。斜面の向うに池田湖が見え始め、だんだんと全体が見えてくる展開だから、前へ前へと気持ち引張られて行く。</p> <p>2時間で頂上に着いた。円錐型独立峰の登山道は景観の変化が乏しくなるが、開聞岳は山の単純な形態に素直に同化しつつも景観を楽しむルートデザインが素晴らしい。正に“グッドデザイン賞”のものである。</p>			

山番号	山名 (別名)	登頂順	標高M
100	宮之浦岳	22/100	1,936
登頂年月日	山頂天候	年齢	山中宿泊小屋
1997.6.2 平成9年		51	6/1-2 グリーンホテル (料理は期待以上に良かった)
メンバー	主催	登頂の登りヤクスギランドに行った。人工ではなく自然そのもの。溪谷の濁流の水量と勢いに度肝を抜かれた。さすが屋久島！	
単独	複数	ガイド	人数
			どういう訳か九州の多くの登山メモや資料が見当たらない。抜粋を記載した日誌を頼りに書いた
コース	5/31		17:25大阪南港、大島運輸「ニューあかつき」出航
	6/1		14:15屋久島 宮之浦港 志戸子ガジュマル公園、屋久島自然館見学⇒「グリーンホテル」
	6/2		5:00⇒6:30登山口7:10淀川小屋(朝食7:25)⇒ 10:52頂上⇒15:45登山口⇒ホテル
	6/3		5:08⇒9:30ヤクスギランド10:15⇒1:25出航 外洋航路で船がよく揺れた⇒6/4 6:50大阪南港⇒出社
九州の最高峰、百名山最南端の宮之浦岳。沖縄便の飛行機からいつも雲に覆われた姿を見て来た。とうとう来たぞと云う気分だ。特に引率は無く勝手に登って降りてこいのツアーなので、却ってみな遅れまいと頑張った。亜熱帯特有の植生、道は樹木の根が縦横に生えて登り辛い上に、やはり途中からは降雨、地図を頼りに歩いた。下りで初めて膝痛を経験し、以降サポーターの使用が始まった。			



## おわりに

「十人十色」とか「百人百様」といわれるように山には百の相があり、一律な見方ではなく多様な観点でとらえられる奥深さがあることを深田久弥が教えてくれた。結果、多様な目的や志向を抱えた人たちがそれぞれの思いを満たすために山に登る。私はまさにその多様な人々との出会いを通じて多くを与えてもらったように思う。

ところで「百」にどのような意味があるのか。学生時代に「良い椅子とは」の答えは「有って無いようなものだ」と聞いたことがある。頭で考えるのではなく、良いとされ歴史に残るような椅子を百個座ってみて初めてそれを語れるようになるというのだ。十や二十では何もわからないし、評価もできない。それが五十、六十座るうちに何となく感ずるものに気づく。そこからがその人にとって良い椅子探しの始まりとなるのだ。山もそうではないだろうか。始まりに気づいたらもう百こだわる必要はなくなる。結果その人にとってゴールのない「私の〇〇名山」になるのだろう。私の場合はそこが曖昧なまま百座を登った。単純だが山を見ると登りたくなくて体がうずうずするから登っていたが、自分にとって登る目的が何なのかは登ってみてから気づくのかもかもしれないと何となく感じていた。

奇しくも私は50座を越えた頃からか、何となく多様な人々に心を動かされていることに気づいた。今、百枚の日記を仕上げたて結局思い出すことは必ず人との出会いがあった。私にとって「百名山は何だったのか」と自分に問えば、答はそこにあると思える。もちろん自然から学ぶことは多いが、「いろいろな人の人生」に出会えたことは貴重な体験だった。山に来てそれぞれがそこで人生の何かを補っていることに気付いた。山で「いろいろな人生模様」に出会い心が動かされた時、それは大げさに言えば、自分の生き方への反省であり答えでもあったように思う。山はそれなりの人生道場だった。単独登山や気心知れた友や家族との登山、知らない人たちとのツアー登山、さらにはプロのガイド登山、何れも私にとっての非日常の人生道場だった。これからはこの手記をめくりながら今回あまり書けなかったその辺りのことを改めて思い起こしてみたい。今改めて思うことは山に感謝、出会った人たちに感謝…これに尽きる。ありがとう！

保田 孝

